

## SDGsブームのいま、「持続可能性」を問う

環境問題をいわゆる「環境好き」の人びとの考察対象にとどめず、統治・支配のあり方を議論するうえでの格好の素材として見出す書

喜多川 進



これまでの先進諸国の環境政策研究のなかで論じられてきた「環境国家」とは、著者の整理によれば、環境行政政策の整備や体系的な環境法が整備され、環境専門家が育成されている国家とされる。

一方、東南アジアでのさまざまなもの（フィールドワークを通して著者が見出した「環境国家」とは、「特に地域の人々から見て）環境保護や資源の持続可能性確保を目的に行われる介入の影響が、自然環境だけでなくその地域の人々の暮らし全体に及ぶよくなれた国家」（12頁）である。そ

ただ、反転の態様はさまざまである。すなはち、自然保護団体による先住民の強制排除は分からやすい反転の事例であるが、コミュニティへの森林管理の委譲がもたらす反転という一見しただけでは分かりにくいものもある。本書は、このように多様な反転の態様をインドネシアの灌漑用水、タイの共生林、カンボジアの漁業資源などの事例ながら明らかにしている。その結果、「環境にやさしい」は、政策が、地域の人々を苦めず、実態が浮き彫りになつてゐる。

「環境国家」という言葉は、そのおやじの意味を推し量るに過ぎないが、それほど馴染みがあるものではない。ドイツの環境法学者らが環境国家(Umwelstaat)を論じることがあり、また本書でも言及されているように英語圏においても環境国家は議論されてはいる。しかし、「環境国家」という言葉は人口に膾炙しているわけではない。さらにそれが「反転する」とはどういうことなのだろうか。何が論じられているのか興味をそそる表題である。

「環境国家」の反転とは、「環境保護」の大義の下に、地域の人々の生活が国家の枠組みに翻弄されて、人々と自然環境との関係がかえって悪化していくこと」(iii~iv頁)を指しており、言い換えると、中央・地方政府や国際機関などによる環境政策が、地域の人びとを管理するための道筋へといつまいか轉化することである。「こうした転化は人々の環境保全意欲を低下させ、さらなる環境劣化の引き金になりうる(10頁)と記者は警告する。

続いて著者は、この反アイデオロギーにあると力説する。立派な生態学観、国家に抗つて、あつた宇井純の公害原論、は、製學問の色彩も帶びていよいよ源論を並置し、手際よく「眞面断する腕力」には驚くばかりである。

国内外でのフィールドワークとの理論的検討を繋げ、資源・環境問題に関する歴史的著作を世に問うてきた著者の、について、本書は環境論の大成といってよいだろう。

治・支配のあり方を議論する  
いぶしの格好の素材として見  
出します。昨今はSDGs  
(Sustainable Develop-  
ment Goals : 持続可能な  
開発目標) ハーべアが、  
本書をSDGsの反転の芽を  
察知すべしとの驚異の書と  
みなすらしいのがあります。  
この書は新たな研究を拓く  
可能性をもつてゐる。ハーベア  
は、その他の「歴史を描寫す  
ておきたい」著者たる権限の  
集中した開発国家となりや  
い後発国たるが、先進国よ  
りも反撲する傾向が強じてし  
てゐる。一方、先進国で起  
る

佐藤 仁著  
▶反転する環境国家  
「持続可能性」の罠をこえて  
6・30刊 四六判366頁 本体3600円  
名古屋大学出版会

り、環境政策が地域社会・住民に及ぼす影響をほどくと解明してこなかつたからである。

新しい視座を提示することも、「環境政策を真に社会・科学的な課題にしていくための土台を準備」(vi頁)したといえる本書は、環境問題をいわゆる「環境好き」の人びとの考観対象とするあらず、必ず

新しい視座の提示の次の段落では、本書の刺激を受けた読者が、環境国家との反転をめぐる議論のなかに、環境国家との親和性も強い資本主義、クローバリゼーション、ネオリベラリズムなどを位置付けるという方向性もあるのしよう。その意味で、この本でなされた問題提起の奥行きは深い。

統じて著書は、この反転を  
食い止めるためのヒントを  
一九五〇、七〇年代頃の日本  
で生まれた次の三つのアーティ  
ニアにあると力説する。文明  
の生態史觀、國家に抗うべ  
あつた宇井純の公書原論、官  
製學問の色彩も帶びていた資  
源論を並置し、手際よく一刀  
（Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標）ハーベアのねだり、本書をSDGsの反転のキモを  
察知するべくしての驚世の書と  
みたらしいんだが。